

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発刊
平成三十年十一月一日発行
（第百二十一巻第十一号）

ホトトギス

十一月号



風雅の小筥〔十一〕

廣 太 郎

俳句を作る時、皆様は先ずどのような事に気をつけられるであろうか。いくつかあるとは思いますが、やはり最も重要な事の一つとして、五・七・五の十七音に纏める、というのがどうしても避けては通れない道である事は疑う余地がないだろう。勿論字余り、句跨りというものが絶対駄目という事はないと思うが、字足らずは少し寸詰まりになり、あまり頂けないとは思ふ。その字余り等の話は将来に譲るとして、基本的に五・七・五の十七音の基本的なリズムを前提にして今回は話を進める。

丁度二十年前になるが、ホトトギス平成十年六月号、その頃は私の選で「若水集」というコーナーがあったのを御記憶だろう。そのコーナーでは兼題を設けていたが、その時の兼題の一つが「バレンタインの日」で、それについて私が少しコメントをさせて頂いた。ここではその内容を繰り返す事はしないが、未だ本誌をお持ちの方は是非御覧頂きたい。つまりこの「バレンタインの日」という季題は言葉として少し長いので「バレンタイン」だけで表現する事は非であった。結局季題に限らず、言葉を省略してしまつて、却つて意味が判り難くなつてしまふ事が、最近の御投句を拝見していても多くなつて来たのではないかと思う。極端な例で、このバレンタインの日を詠んだ句で「バレンチョコ」という言葉に實際出会つた。一般的な言葉としても「デパ地下」「コンビニ」「スマホ」はニュースでも使われるが、考えて頂きたいのは、詩として趣のある言葉という観点ではどうだろう。長々と書いたが、申し上げたいのはその詩趣である。

旬日記 汀子

平成二十九年十一月一日 ロイヤル俳優

風の日々通り過ぎたる小春かな
残菊や強き嵐に立ち尽くす
行秋や刻々過ぎてゆく時間
我も又残菊となりおほせしや
何も彼も過ぎ行く時間小六月

十一月五日 下萌旬会

芭蕉忌のはづれにありて巻く連歌
かく晴れしことが案外冬らしく
快晴にはじまる冬の日曜日
芭蕉忌が来れば今年も足早に
十一月七日「牡丹」より依頼

重ねゆく美しき歳月年迎ふ
十一月七日「牡丹」より依頼

甦りたる牡丹にある月日
十一月九日 清交社

立冬や長寿全うされたまふ
木の葉散り尽くすまで待つ心かな
誰がためとなく書き残す冬の稿
又明日は日歸りの旅冬めきぬ
栗りたく拾ふ木の葉もありぬべし
立冬やこれより月日走り出す
十一月十日 工業倶楽部

終の花と気づきてたもとほる
ひそかに京の紅葉を見る予約
十一月十一日 関西ホトギス同人会

この会の今昔問はん島小春
年内の仕事を山を崩す冬
みそなはせ給へ仲間の冬めく計
誰彼に逢へば語らん島小春
十一月十二日 関西ホトギス俳句大会
快晴といへる寒さのあることを

この会の済めば駆け足島の冬
十一月十四日 大阪倶楽部

客招く日を炉開とすることに
冬めくと思ひたるより旅支度
これよりの冬めく旅を心して
これよりは冬めく雨と心して
十一月十四日 綿業倶楽部

散り尽くすまでは掃かざる木の葉かな
昨日まで油断してあし小六月
六甲の山脈親し小六月
十一月十五日 夏潮旬会

山茶花の咲き継ぐままに旅にあり
山よりと聞けば酸苇と言はずとも
萩黄葉そこよけり庭のはじまれる
模様替風邪の欠席多き会
取材終へ小春の庭を引返す
全快の葉さん迎へ小六月
十一月十六日 きさらぎ旬会

住職の誘ひは京の冬紅葉
閑や一枚のドア裏表
散り尽くすまでの歳月冬紅葉
なほ続く見頃に京の冬紅葉
閑に旅路華やぐ一と所
十一月十六日 アネモネ旬会

あきらめといふ言葉なし小六月
東京の朝の寒さに降り立ちし
残菊となりしともなく活けられし
突然の訃報に寒き一日かな
又電話かかりに寒き一日かな
十一月十八日 中国ホトギス同人会

どの峰も大山に見え冬の旅
ひととき悲しみ誘ふ時雨かな
止みさうに止みさうに旅時雨あり
雨雪になりさうと聞き旅にあり

雪になるかも知れぬ旅心して
匡子さん冬の砂丘をみそなはせ
時雨れては君の涙と思ひけり
十一月十九日 中国ホトギス俳句大会

この旅に持たねばならぬ時雨傘
明けてゆく日本海の冬らしく
晴れぬても時雨もよひの抜けぬ旅
十一月二十日 アサヒカルチャー

山に雪をたるを見つつ急ぐ帰路
人愔ぶ心抱き旅の冬
「俳句四季」より依頼
人悼み人惜み年改る
十一月二十一日 有恒俳旬会

冬虹の立ちて偲べる人のあり
冬の残して行きし庭を掃く
旅の帰路彩る山の雪見つつ
いくたびも失ふ所在帰り花
すれ違ふ犬の散歩や冬の道
十一月二十一日 無名会

まだ在すかに旬会場ありし冬
在すかになほ在すかに冬の会
惜みても帰りに来ぬ友偲ぶ冬
旅多き日々小春のつづかざる
十一月二十三日 旬会と講演の会

華燭待つ家族集へば小六月
店閉ざしありぬ勤労感謝の日
予報では冷たき雨も上るとか
十一月二十四日 時雨旬会

風の吹きすさぶ旅日本海
山に雪旅路の帰路の華やげる
掃いて又落葉の庭となりけり
好き嫌ひなき大根を炊くこと確か

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年十一月二日 蕉心会

下町の今日は川の音冬近
昨日の日は川見ありけり
冬近風の嘯きありにけり
晩秋の船音空に消え易く
信州に上州に秋惜む旅
爽やかに人に囲まれ芭蕉像
澄む水を引つ掻きながら船往き来
鎌倉に繋ぐ忌心石路明り
十月三、四日 岡山学芸会
邑久伊保夢二を偲ぶ暮の秋
吉備の空搔き混ぜてゐる赤蜻蛉
一片の雲さへ瑕瑾天高し
幸福の鐘てふ爽やかな音色
秋潮を使ひ切つたるせり
帆を上げるより金風を友として
十一月五日 野分会 芦屋例会
末寺てぶ親しみありて冬安居
昂りてボジョレーヌーボー一口
花嫁の父となる日やそぞろ寒
先生と呼ばれる人やそぞろ寒
十一月五日 青嵐会 芦屋例会
鎌倉に忌心集め石路は黄に
義仲寺に大綿飛べば偲ぶ人
大綿の飛翔天下を俯瞰して
ヴァイオリンのトラウマ解けて石路日和
石路の黄に虚子館の庭目覚めゆく
十一月六日 刈谷市民俳句大会
暮の秋故郷めきし刈谷へと
卓上で果つ吾の旅明日は神の旅
今日では旬友の心秋高し
十一月七日 カトリック新聞選者吟
吉備路より三河路へ秋惜む旅

十一月九日 「俳句界」 出句
対岸の柳散らしてゆく日差
秋日和草津の出湯に癒され
爽やかに鶯の輪を描く小豆島
この霧の彼方は四国小豆島
石路の花より始まる庭の色
石路の黄を灯し花終る大舞台
散るといふ山茶花命盡きぬ
小春日の名苑命盡きぬ
十一月九日 名苑命盡きぬ
鷹の空地球を包み込んで六
名苑の余白を包み込んで六
日本の美とは山茶花の一輪に
十月九日 「四虹」 一月号近詠
銀世界鋼となりし雪眼鏡
雪折にも確とある鼓動かな
雪沓や山の生活は夜更な
雪兔融けて娘は嫁ぎゆく
十月九日 「あらうみ」 一月号近詠
凍土の音固まつてをりにけり
聖人の忌日を祝ふ鐘牙ゆる
悼みて祈りに言葉の出心かな
三寒の古都に四温の口ひかな
靴の手を重ね合ふ別れかな
十一月十一、十二日 関西ホトギス同人会、大会
モノレール音なく綺羅纏ひくつ
波の綾小春日の滑羅纏ひくつ
冬うちら母校キャンパス迷ひも
十月十三日 朝日カルチャー若草句会
火箸持つ指しなやかに炉を開く
日開や床に茶花の香るより
木の葉舞ふ都庁天辺目指しつ
十一月十二日 十二月は嬉しさかな
君何時も十二月は嬉しさかな
十月十五日 北國文芸選者吟
蒼天に刺さる十字架神の留守

十一月十六日 登高会
人生の節目を迎へ冬に入る
又若き計報の花日和伴ひ
旅の留守預かる狛犬の阿吽
十一月十六日 「ミリーズ」 七周年
冬帝の威に七年を重ねゆく
十一月十八、十九日 中国ホトギス同人会、大会
神の旅君までついて行かずとも
早世の藩主を悼む冬紅葉
冬帝に若き魂攫はるる
砂丘てふ朝なき魂攫はるる
山陰の朝の變幻片時にけり
傘を打つ叢に募る旅心雨
十一月二十二日 目黒学園句会
凧に鳥取砂丘縮みゆく
凧に背中押されて赤のれん
落葉焚猫は素通りして行けり
切干を並べ一村落もれる
十一月二十三日 ホトギス社句会
大根煮る娘を嫁がせる日を前に
冬耕す地球に果てがあるやうに
冬耕の鋤へ日差を丸め込みに
十一月二十六日 青嵐会 東京例会
娘を嫁に出してより神迎かな
蒼音を冷たく春へ抜ける朝
蒼天を掃く雲小春仕上げゆく
十一月二十六日 野分会 東京例会
大屋根の鴉尾冷えびえと冬安居
冬安居法灯めけるタワいの灯
十一月二十八日 若水句会
大根や地軸歪めて太りゆく
大根を煮る香に朝の動き出す
風除に隣人遠くなりゆけり
オホーツクの叫び風除受け止めて
北山の風を叫ぶ風除受け止めて
連に始まる湖北朝時雨

雑詠 廣太郎 選

花の下犬の目犬を追ひにけり 澁川 山本素竹
 花の影ピンクに見えてきたりけり 同
 曇天に生るる空色石鹼玉 同
 日盛の聖堂満員叙階式 大阪 酒井湧水
 連願の涼しき調べカテドラル 同
 喜びの汗の額や新司教 同
 老吾のフットワークも五月来ぬ 相模原 木村享史
 小判草やまぶき色になりたくも 同
 家系図に粉飾すこし武具飾る 同
 光秀のこころ計れず明易き 福知山 吉田節子
 光秀の依代なりし鯨涼し 同
 時鳥今も慕ひて光秀忌 同
 道頓堀コースてふ名の船遊 神戸 後藤比奈夫
 ほぼ判る八百八橋船遊 同
 水門を開きてみせて船遊 同
 雲上の明るさへ出し旅五月 長岡 安原 葉
 旅五月機内少々揺るとも 同
 母と子と距離置く席も旅五月 同

炎天に人を待たせてをりにけり 熊本 岩岡中正
 人ごゑに山蛭降つてくるといふ 同
 黒揚羽より一陣の風起こる 同
 月鉦の月に揺らぎのなかりけり 神戸 和田華凜
 山女焼く女将の塩のふり加減 同
 煩惱の消え去るほどに汗をかか 同
 山荘にたどりつきたる夏帽子 同
 額の花心平らに過ごす日々 龍ヶ崎 今橋眞理子
 五月晴雨の匂ひに明けてゆく 同
 留守たのおセンサーつきの灯と守宮 東京 田丸千種
 山男酌めば唄ふや夏炬の夜 同
 陽水もミックジャガーも夏炬かな 同
 花菖蒲神の命の白さかな 福山 竹下陶子
 武の神のまことに太き梅雨きのこ 同
 原爆の消えざるの焰風薫る 同
 尺蠖や空間も亦丈を持つつ 同
 夏草や奥へと沈みゆく径 香川 湯川 雅
 影足して二の字となりぬ糸蜻蛉 同
 雷一つにぎはふ銀座けちらかす 東京 橋本くに彦
 路地を出る匂ひ定かや鰻の日 同
 山は呼ぶ万歳の声登山杖 同
 眼に見えぬものに花粉と涅槃西風 同
 大石忌つくりばなしは美しく 同
 雪解けし庭にころんでしまひけり 同
 同 大久保白村

雑詠句評（十月号より）

矢車の日本男子の音と聞く 福山 竹下陶子

轍竿の先端の矢車が、風を切つて大きな音を立て、威勢よく廻っていた。作者は、その音を日本男子を象徴する音として聞いたのである。日本男子とは、日本のために、身命を賭して勇敢に活躍する日本の男子のことであった。それ故に日本男子は、矢車のように、威勢よく風を切つて行動しなければならなかったのである。

（仁義）

子供の日を中心に揚げられる鯉轍は、夕方になると降ろされるが、竿や、その先に付いている矢車は期間中降ろされる事なく風の中からと音を立てて回っている。その音を勇壮な日本男子の音と聞かれた作者である。端午の節句の伝統的な姿を表現して日本の一面を見事に捉えている。（廣太郎）

偲ぶときさくらさびしき色と見る 相模原 木村享史

自然は見る人の心そのままに姿を変えて現われる。故人を偲ぶ時、花の美しい色は淋しい色に見えるのであろう。「色となる」ではなく「色と見る」とした事で感傷を抑えた表現となり、却つて作者の淋しさが伝わってくるように思われる。（紀子）

満開の桜は、どうしても華やかな印象が先に立ち、花見等はどちらかというと宴会をイメージしてしまうだろう。しかし作者はこの花を見て、嘗て一緒に花を愛でて、今ではもうこの世にいない人に心を寄せているのである。桜のイメージが却つて新鮮に語られている句である。（廣太郎）

天地有情

盆梅や羽音も景の一部分
 寒明や百寿の祝ぎに参じ得て
 野の葶すべて摘み来て手向けなむ
 春眠の途中で覚めて老かなし
 偲ぶこと山ほどありて新茶かな
 また会へしこの嬉しさよ初燕
 明易や虚子を語ればみな若し
 明易やこの世に君はもうぬない
 雷の謂れは知らず諸蔓
 かざしぐさなどと洒落てもみたかりし
 青芒一本をわが旅情とす
 十葉の押し寄せてくる日暮かな
 母の日やただ想ひ出を語るのみ
 短夜やも少し欲しき夢会話
 輪台にブローチほどの苔菊
 凡夫なる愚を知り霜を踏みにけり
 天の川烟のごとくありにけり
 玉虫の棲む木を知つてをりにけり

東京 稲畑廣太郎
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 浜崎素粒子
 同
 長岡 安原 葉
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 東京 河野昭彦
 同
 福山 竹下陶子
 同
 群馬 中杉隆世
 同

い子選

美人なりどんな夏帽かぶりても
 猛烈な暑さ怖れて家を出ず
 蟬鳴いて背山前山雨の中
 みよし野の雨にも灯る蛭かな
 人の美し水の美し里植田風
 蛙跳ね但馬の大地には力
 籐寝椅子違ひなき老い置いてゐる
 夜の来て邪魔物のごと籐寝椅子
 春夕べ富士際立ちちて輝けり
 噴水を被ふ花屑色褪せず
 六月の雨なき雲の白さかな
 灯を消せば網戸に迫る山の闇
 邂逅や与謝に涼しく住める君
 十五妃を従へ今宵女王花
 飼猫の逝き恋猫のこなくなり
 麦踏みて昭和一桁ぐわんばれる
 万緑や一樹千年てふいのち
 咲きさうな月下美人を皆のぞく

東京 今井千鶴子
 同
 神戸 三村純也
 同
 同 和田華凜
 同
 熱海 嶋田一步
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 同
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同
 神戸 千原叡子
 同
 東京 大久保白村
 同
 宝塚 水田むつみ
 同